

居酒屋的などころ。テーブル席に横並びで二人が並んでいる。母は煙草を所持している。

母「そうすけ、そっちいつちやだめよかえって来なさい（ひもで引っ張る）何食べるー？これ？あ、これかなー」

そうすけ「だやーこりえ」

母「そうすけ、そればつかだーめ」

そうすけ「こりえ」

母「だめ。こっち食べなさい」

そうすけ「やーだやー！だやー！だやー（痲癩をおこす）」

母「そうすけ落ち着いて！わかった！わかったから。私が食べるから。私が食べる。私が食べたら、おんなじことだもんね」

その最中にカワグチ登場

カワグチ「あのーすみません」

母「あ、はい」

カワグチ「あの、相席って言われたんですけど、いいですか」

母「ああ、そうですか。どうぞ」

カワグチ「すみません」

母「大分混んできたんですねえ」

カワグチ「ああ、そうみたいなんですよ。あ、すみません。すみませーん」

店員、ハイといいながら来る。服がみぞおちくらいまでの丈でお腹がすっかり出ている。

店員「はい、ご注文は」

カワグチ「…えーと、あの、この人はみんなそうなんですか。」

店員「えなにがですか」

カワグチ「それ、お腹」

店員「ああそうですよ。店名見ました？」

カワグチ「ああはい見ましたけど」

店員「なんでした？」

カワグチ「キッチンオーナカさん」

店員「あ、それおなかつて読むんですよ」

カワグチ「あ、そうなんだ。オーナカさんではない…？」

店員「あ、全然ちがいます」

カワグチ「あ、そうですか、ややこしいな。すみません、じゃ、あのハイボールで」

店員「はい、かしこまりー（小走りではける）」

カワグチ「クセがすごいな…」

母とカワグチなんとなく会釈しあう

カワグチ「あ、あいや、なんか相席って僕初めて、なんですけど、これってなんかこうお話、するものなんですかね」  
母「あー、えどうでしょうか」

カワグチ「ほかの人は、どうしてるんですかね」

母「（ほかの席を見渡すが何とも言えず）どうでしょうねえ。そんな、無理には話さなくてもいいんじゃないですか」  
カワグチ「あ、まあそうですよね…」

間

カワグチ、そうすけに赤ちゃんをあやすときにやるようなべるべるばーみみたいなのをやる  
徐々にそうすけとともに盛り上がっていく。抽象的になっていく。

母「ちよつとちよつとちよつと、何やってるんですか？こら、そうすけも」

二人座る。店員来る

店員「おまたせしました。（ハイボール渡しながら）すみません、相席で」

母・カワグチ「いえいえ」

ハイボールのグラスがなぜかめちやめちや小さい

母「：小さいですね」

カワグチ「ええ、とても小さいですね。あの、すみません」

店員「え、あはい」

カワグチ「あの、これ小さいですね」

店員「えっと、それはクレームですか」

カワグチ「ああいやいやいや、クレームっていうか、あのー小さいなあと思って」

店員「あそうですか？僕からすればこう遠近法に即していい感じですけどね」

カワグチ「いやいやそういうことじゃないでしょ」

母立ち上がつて店員のそばに

母「うーんたしかに」

カワグチ「いやいやたしかにじゃないの」

店員「（舌打ちして）んだよめんどくせーな（言いながらはけて普通サイズのハイボールを持ってくる。小さいほうをストローで腹から飲む。口からげっぶをして帰る）」

カワグチ「げっぶはそっからでるんだ…。とんでもない店だ」

カワグチ少しハイボールを飲み、

カワグチ「あのーやっぱ大変ですか」

母「？」

カワグチ「あ、いや、そのお子さん育てるの」

母「ああ、障害があるから？」

カワグチ「（気まずそうに）あ、いや、普通に…あ、まあそうですね」

母「んーまあたいへんですけど、そんなものだと思います。あ、それにうちはほかと比べてお手軽なんで。一石二鳥つていうか」

カワグチ「一石二鳥？」

母「あ、ちよつとごめんさい、少しトイレに」

母ハケようとするが（下手側）そうすけとへその緒でつながれているために途中で引っ張られてこける。何度かやるがそうすけが動かないためいけない。

母「そうすけ、もうちよつとこつちよつて」

そうすけ「喜んでいる、歓声。ちよつと寄る」

母「ありがとうそうすけ」

そうすけが下手ぎりぎりまでハケると母はトイレに行けるようだ。

カワグチ「…なんだか、わかんないけど、君大変だね」

そうすけ「…ずつと待ちわびてましたよ。今日か、今日なんですわね」

カワグチ「!!!え、君、…どういうことだ？喋れるのか？（芝居くさい）」

そうすけ「はっはははは、いいですよそういう小芝居は。それにしてもまた顔をずいぶんと変えたんですね、最初誰かと思いましたが」

カワグチ「なんだ気づいていたのか。そうだ今日だよ。今日お前はしっかりと役目を終える」

そうすけ「僕を道具みたいに言わないでください。それにしても母さんが心配ですよ。気が狂っちゃうんじゃないですか。いきなり服ぬいじやったりして」

カワグチ「まあ大丈夫だ。おれがなんとかする。ほら。（そういつてはさみを取りだして掲げる）」

そうすけ上手側にいるかわぐちのもとにはさみを取りに行く。そうすると、母は用を足している途中に引っ張られることになるので、下半身が露わな状態で舞台上に引っ張りだされる

母「ちよつとそうすけ！持ってまだ！まだ待って！」

そうすけ「あれ、ほんとに脱いじやってる」

カワグチ「ばか、お前のせいだろ！」

そうすけ下手よりに戻る。そうすけ、カワグチ母がはけるのを見送る

そうすけ「でも、今日くるなら前もって言ったださいよ、父さん」

カワグチ「すまん、急だったんだよ。急に出来上がったから。なかなか大変だったんだぞ。血のつながりつてのは案外複雑なんだよ。血のつながっている者同士は独自の DNA の複製が行われている。赤の他人にそれとまったく同じ DNA を入れて拒絶反応を起こさないようにするのにかなり手こずってしまった」

そうすけ「僕にはよくわかりませんよ」

カワグチ「お前も明日からしつかり勉強しろ、な」

さえぎつて母戻る

母「ごめんね、そうすけ。（カワグチにも）すいませんね」

カワグチ「ああ、いえいえ」

母「(そうすけに) なにお話してたの?」

そうすけ「あ、だ、えつとこりえ、へしよによ緒」

母「ああ。あ、そうなんですよ、これ。これ、へその緒なんです」

カワグチ「え、へその緒って、あのへその緒ですか? 生まれたとき切るやつ」

母「ああ、ええ、そうです」

カワグチ「で、それは、そのなんで」

母「切らなかつたんです」

カワグチ「切らなかつた? え、なぜ」

母「逆に切るとどうなりますか」

カワグチ「それは、別々に」

母「え、だってそれって嫌じゃないですか? この子がいつか私のちからを必要としなくなる日があるでしょう。そして私から離れちゃうかもしれないってことでしょう。ありえないわよ。世の中にはほんつとにろくな女がない。

そんなろくでもない女と、つながるってことでしょ。この子が! あ、ああ、! あああ! ああああ! (パニック。そうす

けも同時にパニック)」

カワグチ「そういうものでしょう」

母、息を切らしながら腕をゴムでしばり覚せい剤注射

母「はい、そうすけ落ち着いて。そうよ、いい子よ」

そうすけ、ご機嫌

カワグチ「おい、つななんですか」

母「や、や、やだ! そんなん聞かないで」

カワグチ「いやいやあなたじゃないですよ」

そうすけ「45ちゃん」

母「ちよつとそうすけ! ちよつとやだ!」

カワグチ「いやじゃなくてそのそうすけくん」

母「あ、なんでも。22歳。22年の間このくたで私はこの子を育ててきたの。この子の思ってることはなんでもわかるんです。そしてこれはとても合理的なの。このくたは」

カワグチ「とてつもなく不便に見えましたが…」

母「この子はうんこをしなくていいんです。いやでも、うんこをするとき大抵おしっこも一緒に出るから、うんこもおしっこもしなくていいんです。いらぬものは私に流せばいいですからこの管で。そして食べ物も、私が食べたもののいい部分だけ、栄養だけをそうすけは取ることが出来る」

カワグチ「麻薬も?」

母「そう。私が気持ちいいときはこの子も気持ちいい。二人三脚? んーん、一心同体? 一心一体? 以心伝心?」

カワグチ「いや、わかんないですけど」

母「まあ、とにかく子供を作った以上子供を守る。それが親の義務でしょう?」

カワグチ「でも、へその緒って使い続けられるんですね」

母「ええ、まあね。皆知らないようだけれどできるですよ。ちよつと手術は必要だけど」

カワグチ「誰かにやってもらったんですか」

母「夫に。医者だったから」

カワグチ「ずいぶんと優秀な方なんですわね」

母「ええ」

カワグチ「今そのご主人は？」

母「いなくなりましたよ、いつかもう忘れましたが。なにか研究することがあるって」

カワグチ「そう、なんですネ、それはそれは」

母「まあでも、いいんです。私たちは20年以上二人で幸せにやってきましたから」

カワグチ「何か困ることはないんですか？例えば、そう、これじゃそうすけくん？社会に出ていけないでしょう。働けないし。ていうかそもそも学校にも行ってないでしょう」

母「行く必要ないじゃないですか、あんなとこ。集団に同じ服を着せて、同じ方向を向かせて。何を教えてるかもわからない！おぞましい」

カワグチ「ああ…」

母「あ、でもいざいくつてなったら私、授業参観は得意ね」

カワグチ「得意というかそれだと毎日が授業参観になっちゃうけど」

言い終わり同時にそうすけが赤い紐をきる

カワグチ「え？」

母「え？」

カワグチ「…切れた」

母「そうすけ！なんてことをするの？！いや、なんてことをしたの！？そうすけ！あなたじぶんが何したかわかってるの？あなたこれないと死んじゃうのよ！！そうすけ！そうすけー！！（抱擁）」

暗転 ベートーヴェン第9「歓喜の歌」

ゆつくりとカワグチがでてる

カワグチ「10分。10分といえば何の時間でしよう。学校の休み時間ではありません。そうだな、たとえるなら人工呼吸を外せない人が無理やりに人工呼吸を外された後、そのあと、どれくらいで息絶えるか、息絶えるまでどれくらいのことされているか、いわばその人に残された猶予をあらわしています。しかし、往々にしてその猶予というものに当人はそれほどナーバスではありません。それどころか、気づいていないことすらある。どちらかといえば、その周りの人の方がナーバスになるのです」

カワグチの病院にかわる。カワグチ白衣を着ている。ベットの上でそうすけは横たわっている。ベットに腰掛ける母と、椅子に座っているカワグチ。母はずっと電話をかけ続けている。

母「あの人はどこにいるのよ、全然つながらないのよ」

カワグチ「私にもわかりません」

母「あなたも聞き覚えがあるっていったじゃないの」

カワグチ「ええ。確かに、昔同じ病院にいた気はします。しかしですネもうずいぶん前のことですし…」

母「頼むよ！時間がないんだよ私たちには」

カワグチ「私たち…？」

母「私とそうすけよ」

カワグチ「ああ…あと10分」

母「10分の間にもう一度一つの神経もたがわずにへその緒をつなぎなおさないとそうすけは死んでしまう」  
カワグチ「それが出来るのは、あなたの旦那様…なんて言いましたっけ」

母「カワグチ」

カワグチ「そう、カワグチさん。彼しかいない？」

母「そうね。普通の医者はそんなことしないでしよう」

カワグチ「ええ、まあ」

お腹がでた看護婦がただ下手から上手に通過する

母立ち上がっていらいらした様子でたばこ吸う。電話はかけている

そうすけが死にそうな咳込みを始める

カワグチ「(小声で) おい、そうすけ、今は切れてんだからいいんだよ咳込まなくて」

そうすけの咳込みおさまらない

カワグチ「おい、下手な芝居やめろ」

母気づいて

母「え、そうすけ！？そうすけ！大丈夫？そうすけ！そうすけ！そうすけが…そうすけが死んじゃう！ねえ、そうすけが死んじゃうよ」

カワグチ鎮静剤を打つ。

カワグチ「ひと…つ、ふた…つ、み…つ、よ…つ、いつ…つ、はい大丈夫」

そうすけ落ち着く。

母「そうすけ…そうすけ、あなたはかわいそうな子よ。誰もあなたを助けられない。私も。いざというときに助けられない。ねえ、つらい？ぎりぎり生きてるのってつらい？でも少しほっとしたような表情にも見える。もしかしてこれを望んだ？一度は自由に生きてみたいって思ったりしてた？…こんなことになるなら…あ、そうだ。そうすけ、あなたは生まれてこなかった。そうよ、生まれてこなかったのよ。生まれてないなら苦しうかかない。さあそうすけ、戻って。戻るのがよそうすけ！戻って！戻って！戻って！(母はそうすけをみずからの子宮に戻そうとする)」  
カワグチ「ちよつと、もどるわけないでしょう」

問

カワグチ「…私がやってみましようか？」

母「え」

カワグチ「私が代わりに、それ、つないでみましようか」

母「あなたでできるの」

カワグチ「ええ、見たところおそらく」

母「本当に!!一つの神経もたがわずにつなぐのよ」

カワグチ「はいそんなに難しくありません」

母「それなら早く言ってよ！すぐにはじめてちょうだい」

カワグチ「はい。(看護婦に) おい、ちよつと。ちよつと聞こえてる？」

看護婦「(来る) ハイなんでしよう」



母「?？」

看護婦「(来る) ちょっとせんせ〜い。あのお、田中さんの検尿と、佐藤さんの検便なくしちゃったんですけどお、どうすればいいですかぁ」

カワグチ「うるせえええ！知らねーよそんなもん！てめえがうんことしょんべんして提出しとけこのやろうー!!」

看護婦、えーさつき特大サイズのしちやっただばかりですうとかいいながらはける

カワグチ「でね、でね、君とねそうすけがつながっていれば、君が他の男と繋がることはない。君の膣がふさがっているから他の男が入る隙間がない。僕にはしばらく時間が必要だった。母体と子供がへその緒でつながり続けるのは簡単なんだ。しかし血のつながりがない二人がつながるようにするにはまだ研究が足りなかったんだ。でもようやく完成したんだ。もう大丈夫だよ」

母「なにが大丈夫なのよ！」

カワグチ「あ〜〜最高だ。こういう感覚なのか…。」

母「やめてよ！離して！離して！（管を切ろうとする）」

カワグチ「やめる！おい、美和子、やめろ！」

母「名前で呼ぶな！」

カワグチ「やめろよおい！（殴る。美和子はひよろけて後退するが、カワグチはひもで引きよせて抱擁する）だいたいずるいじゃないか、君と血がながれるのは子供だけなんて。夫婦だっがいいじゃないかつながったって」

母「何言ってるのよ、気持ち悪い」

カワグチと母は管をひっぱりあって綱引きみたいになってる

ぴんぴんにはったその管をそうすけがすっぱりちよん切る

ふたり転ぶ

カワグチ・母「…」

そうすけ「はっはははは、父ちゃんと母ちゃんがこけた〜はっははは」

溶暗